

萩と松下村塾

山口県立防府商業高等学校

松本 嗣夫

萩の自然的風土―北浦の冬

山口県の人々は、県の日本海側を一般に北浦と呼んでいる。萩はその北浦の中心をなす人口五万三千の小都市である。周囲を山にとざされた小デルタに開けた町である。

北浦の冬は意外に厳しく暗い。明るく開放的な瀬戸内海側の山陽とは対照的である。特に冬一月から二月にかけては、どんよりと曇った日が続く。気温そのものは瀬戸内海側と大差ないとはいえ、大陸からの季節風をまともに受けるので、人体に感じる寒さは内海側とは比べものにならない。加えて、中国山地が日本海側に著しく偏しているために、北浦地方は地積が狭く近代産業の発達を妨げている。

しかし、毛利氏二百五十年の城下町萩は、山紫水明の自然に恵まれた美しい清潔な町である。市の東南の小高い丘にあ

る吉田松陰誕生地から見渡す萩の町は特に美しい。ここには吉田松陰の銅像が立っている。厳しい季節風と激しい日本海の荒波に立ち向かって、はるかかなたの陽光をつかみとろうとする気概に満ちた雄々しい姿の銅像である。

松陰誕生地に立つて、ゴウゴウたる松籟を聞きながら日本海の浜辺に押し寄せる波濤を眺めていると、松陰の烈々たる憂国の至情を育てた一要素として、冬から春にかけて吹きまくる激しい季節風をあげてみたくなる。

徳川幕府を滅亡に追いやったものは、この北浦の厳しい清らかな風土であったともいえる。

藩校明倫館と吉田松陰

明治維新における長州藩の活躍と勝利は、挙藩一致の「同志的結合」によってもたらされた。この「同志的結合」の要因の一つとして明倫館が果たした役割は

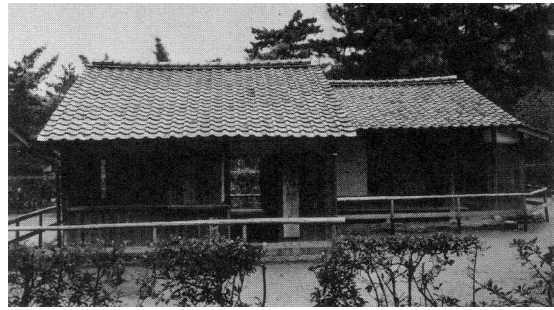
大きかった。

享保四年（一七一九）創建された藩校明倫館は、江戸末期二百余年あった藩校のうち十二番目にできたもので、その学校設備、教育内容ともに全国有数のもので人材輩出の基となった。

『日本教育史資料』によれば、長州藩における郷校および私塾・寺子屋の普及率は全国的にもきわめて高く（維新当時、郷校十六、私塾百五、寺子屋千三百七）、それが庶民教育機関として果たした役割は高く評価されるが、中でも私塾・郷校の主宰者の大半が何らかの形で明倫館で学んだことを考えると、もともとそれらの教育がある意味で明倫館の学校系統に連続、密着していたといえる。加えて、天保の改革による学制改革で明倫館は教育行政を統括する役割をも兼ねることになり、支藩藩校・各郡郷校・私塾・寺子屋などすべて明倫館を中心とする教学体制下に再編され、いわゆる挙藩一致体制を支える精神的基盤をつくり出す基ともなった。

吉田松陰は、天保九年（一八三八）九歳のとき山鹿流兵学の家学教授見習として藩校明倫館に出仕し、十歳で家学を教授している。また弘化三年（二八四六）明倫館の移建に際して、当時十九歳の松陰は四十三か条にわたる「明倫館御再興に付気附書」を藩主に提出している。こ

●松下村塾全景



のように兵学師範として家学を中心に学者の道を歩んだ時期の松陰と明倫館は密接な関係をもっていた。

しかし、九州遊学、江戸留学以後の松陰は思想的にも大きな変化をみせ、自家の家学と明倫館における封建的詰め込み主義の教育の矛盾に悩んで一切を振り捨て、政治的实践の中に情熱を見いだそうとする。

やがて幕末、藩が変化し、明倫館の教育も変わる。文久三年（一八六三）明倫館によって松陰の遺書が集められ、諸生の前で誦読された。元治元年（一八六四）の明倫館の学科改訂により「松陰遺書」がテキストとして使われるようになる。

松下村塾の教育

松下村塾は、天保十三年（一八四二）松陰の叔父玉木文之進が、萩城下郊外の松本村に開いた家塾に始まる。外叔父久保五郎左衛門がそれを襲用し、松陰が主宰して多くの人材を育てた。

松陰の教育の方針は「松下村塾記」「士規七則」によってその大綱を知ることができるが、次の塾の訓言によく要約されている。

自非読万巻書、寧得為千秋人
自非輕一己勞、寧得致兆民安

松陰の教育の眼目は、君臣の義と内外華夷の弁を明らかにし、併せて常に当時

の世界の形勢、日本の実情に通じさせることにあった。さらに塾生らに各自の個性と境遇を省みながら、いかに時代に対処して行動すべきか、を考えさせた。塾には厳正な規則は定めず、生徒を率いるというよりも相互に親しみ助け合い、尊敬信頼し、互いに魂の扉を開いて交わらせるようにした。魂と魂とが通じ合う、士分の者も足輕の子も平民の子も差別なしの教育であった。学問を学問として学んだら、あるいは仕官の道として学ぶのではなく、時代につながり生きた学問をする、すなわち学問を基礎として実践を説いた。

こうした己の信するところを直進する熱狂的な指導は、若い後進の魂をゆさぶった。松陰の教育方法はすぐれて現代的といえる。

松下村塾の歴史的意義

松陰が松下村塾で教育に当たったのは、実家の幽囚室での一年半を推算しても二年半のわずかな期間である。塾生の正確な数はわからないが約八十名と推定される。中にはかつて明倫館において兵学門下であり、引き続き村塾でも師事している者もいる。伊藤博文、山県有朋、品川弥二郎らは明治維新後も活躍したが、維新前後に二十五歳そこそこで早世した久坂玄瑞、高杉晋作、吉田稔麿らは、前記の人々にもましてすぐれた人材であっ

た。八十人ぐらいの門人の中からこのように多くの逸材を輩出したことは、たとえ時勢の然らしむるところとはいえ、ことに驚くべきことである。

ところで塾の大きな特徴の一つに、塾生のほとんどが長州藩内の出身であり、また藩内全域に及んでいることがあげられる。そして松下村塾出身者の多くが、村々の私塾や寺子屋の教育に従事している。松下村塾は長州藩における私塾グループの中心的存在であった。松下村塾は藩内各地に広がる私塾グループの裾野の上にそのピークをなしていた。^(注)

奇兵隊が松下村塾出身者によって結成されたことからわかるように、倒幕の原動力になった士庶混合の軍事力の背景に私塾グループのあったことは否定できない。とすると松下村塾の明治維新に果たした役割は、志士輩出という問題と共にさらに大きな広がりをもってくる。

吉田松陰が、そして松下村塾に学んだ人たちが示した生き方は、藩全体が終局的に選ばなければならなかった先駆性を含んでいた。しかし松陰や松下村塾と明治の変革とが直接につながっているのではなく、そのあいだには長州藩という大きな存在があり、松陰の教育思想や松下村塾が自家培養した人材が藩により、また明倫館によって吸収されていった。こうした広い底辺をもった長州藩の力が変

●注

この問題は、海原徹著『明治維新と教育』（ミネルヴァ書房、一九七二）に詳しく分析されている。海原氏は、松陰らの政治理想の形成が私塾という教育の場において容易に可能であり、しかもそのコミュニケーションネットワークを経て多くの共鳴者を得ることができたのではないかと指摘している。